（別紙様式４―Ｂ）

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生コース）留学結果報告書

７月半ばから、オーストラリアに留学をして約１年の月日が経った。その１年の留学生活の中で学んだことを留学報告書として報告したいと思う。

・留学の目的

この留学を通しての目的は、語学取得、異文化理解、海外の機械技術の取得と挙げていた。その中でも、日本では学ぶことが困難である異文化理解について私は一番注目していた。

・行った主な活動

① Spring semester and Autumn semester

Spring semester（７月～１１月）では Australian Language and Culture course という英語の授業に特化したコースを受講した。私が受講した授業は Australian Conversations Spring, Natural Australia, Neighbourhoods and Stories という３つの授業である。以下にそれぞれの授業の概要と学んだことを示す。

[Australian Conversations Spring]

この授業では、主に IELTS の対策として writing の書き方や、speaking のポイントなどを学ぶことが出来た。また、日常的に使う会話等も学ぶことが出来た。IELTS を受けたことがなかった私にとってこの授業はとても意義のあるものだった。個人的に writing の添削もしてもらえたので非常に良かった。

[Natural Australia]

この授業はまずオーストラリアの環境問題について話し合い、その中から自分が最も興味を持ったトピックについて調べ、その問題点を挙げて、最終的にそれをどのように解決していくかをレポートにまとめるという授業であった。個人的に、この授業が最もやりがいを感じ、力を入れた授業であった。オーストラリアの環境問題について考える機会が与えられたことで、環境問題について深く調べたり、日本との比較をすることが出来たりした。また英語でのプレゼンテーションもあったため、自分の英語力を試すいい機会になった。

[Neighbourhoods and Stories]

この授業は、Sydney の Neighbour から１つだけ選び、グループでテーマにあったことを調べ、プレゼンテーションをするというものである。私は、Newtown という地域を選び、Newtown のファッションについて調べた。この授業を通して、効果的なフィールドワークの仕方やサーチの仕方を学ぶことが出来た。

Autumn semester（3 月～6 月）では学部に移り、工学部の授業を受講した。3 つの subject を受講したが、2 つに集中したかったため、残りの１つは登録しただけという形になった。

［strength of engineering materials］

この授業は工学系の授業であり、ひずみや圧力がどのように物体に

働くかを学ぶ授業であった。英語で工学系の授業を受講するのは不安があったが、自分なりに模索しながら学びたいことを学ぶことが出来た。

［The tourist experience］

この授業はビジネスのクラスで、文系のクラスの授業だった。そのため、Reading や writing の課題がたくさんあったが、そのおかげで自分の reading 力や writing 力が上がったと感じるので受講して正解だったと感じる。

② 旅行

この１年の間にオーストラリアの国内の様々なところに旅行に行った。

[Uluru]

Uluru は日本では通称エアーズロックと呼ばれており、アボリジニの人々の聖地として知られている。

図１：ウルルの景色

日本で言えば仏壇のようなものである。日本ではウルル登頂が有名であるため、私と友人も登山するためにウルルを訪れたが、ツアーでウルルがアボリジニの聖地であることを知り、本当に登ってもいいのだろうかという気持ちになった。現地には現在もアボリジニの人々が多く生活しており、私たちのような何も知らない人が気軽に入ってはいけないような気がした。

[Melbourne & Gold Coast]

シドニーとは異なり、この２つの都市には white 系の人々が多く住んでいるように感じた。シドニーはどちらかというとアジア系の人が多く住んでいるが、この２都市ではアジア系の人はあまり見かけなかった。そして、メルボルンは建物がイギリスに類似していて、そのような点で以前植民地であった名残が残っているのかなと感じた。

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）留学結果報告書

図２：メルボルンの有名な駅　フリンダース　ストリート駅

［Cairns & Perth］

この２都市には夏の間に旅行をした。どちらの都市も自分が住んでいたシドニーとはまた違う雰囲気であり、ローカルの人々も異なった雰囲気を醸し出していた。

③ 異文化交流

人生で初めてルームシェアをすることになり、そこで文化・考え方が異なる他人と生活するのはとても大変なことであると感じた。私のルームメイトは、フラットのコモンルームで夜遅くまで活動していることが多くて、他のフラットメイトのことを気にしないことに最初は衝撃を受けた。また、オーストラリアではみんなが割と時間にルーズであるので、そこが良い点でもあるが欠点でもあると感じた。待ち合わせの際や、提出物の期限なども臨機応変に対応してくれることが多い。この経験により、日本の「時間を守る」という固定観念を崩された。日本人は少し固く生きすぎなのではないかと感じた。もちろんそこが長所なのでもあるが。少し肩の力を抜いてみてもいいのではないかと考えられるようになった。また、驚いたことは、多くの人が日本に対して好意的な印象を抱いてくれているということである。Where are you from?　と聞かれた際、日本と答えるとかなり高い確率で、日本が好き、日本に行ったことがある、これから行く、行ってみたいという回答が返ってくる。日本人としてはとても嬉しいし、これからも日本の文化・歴史を継承していけるように一人一人が努力をしていかないといけないと感じた。日本に帰ってきて改めて思ったことが、外国の人は人々に対してフレンドリーであるということである。カフェの店員や、様々な場所の受付の人、全員が笑顔で話しかけてくれることが多く、そのたびに幸せで今日も頑張ろうという気持ちになれた。日本ではあまり、店舗で店

員の方と長く話をするということは珍しいかもしれないが、その習慣は必ず良い結果を導いてくれると感じる。日本でもそういう習慣が広がればいいなと感じる。

・これから活かしていこうと思うこと

オーストラリアに滞在していた１年間、主要な都市すべてを訪れたが、どの都市にも日本の自動車メーカー（トヨタや日産など）が幅広く流通していて、最初は少し驚いた。特にトヨタは１９５８年に初めてメルボルンに拠点を置き、長い間オーストラリアに進出しているため、シェア率はとても高い（図３）。

	2015	2016	2017	2018
1.	Toyota	Toyota	Toyota	Toyota
2.	Mazda	Mazda	Mazda	Mazda
3.	Holden	Hyundai	Hyundai	Hyundai
4.	Hyundai	Holden	Holden	Mitsubishi
5.	Mitsubishi	Ford	Mitsubishi	Ford
6.	Ford	Mitsubishi	Ford	Holden
7.	Nissan	Nissan	Volkswagen	Kia
8.	Volkswagen	Volkswagen	Nissan	Nissan
9.	Subaru	Subaru	Kia	Volkswagen
10.	Honda	Kia	Subaru	Honda

図３.オーストラリアにおける自動車のシェア率

図３からも分かるように日本ブランドの自動車シェア率は年々増加している。この事実だけではなく、自分が実際に見て日本の自動車が多いと感じたこと、人に聞いて日本の車は最高だといってもらえたこと、その経験から、日本の自動車技術は素晴らしいものであり、日本の外から見る・経験するということも重要なことであると感じた。しかし、燃料電池自動車の station や、電池自動車自体はあまり普及がみられなかった。昨年の１２月、首都であるキャンベラにオーストラリア初の水素ステーションがテストモデルとして建設された。この施設では、実在するガスネットワークに入れる水素普及に備えるために、今現在ある物質や設備でのクリーンな水素をテストしている。このようにオーストラリアもまだ、燃料電池自

動車に関しては模索している。オーストラリアは先進国というイメージを持っていたから意外な結果ではあったが、プロセスなどは学ぶことが出来ると考えた。その国にはその国の得意分野があることを十分に感じることが出来たのは大きな収穫であった。
この１年は自分が思っていた留学生活よりもずっとつらくて苦しいものであったと同時にとても充実して輝いていた。一番に学んだことは人々とのかかわり方である。生まれも育ちも文化も何一つ違う人が周りにたくさんいるという状況で自分の振る舞いや自分の気持ちの表現の方法など日本にいたら考えなかったことについて深く考えることがあった。自分の意見をはっきりしっかり伝えることは自分を理解してもらう１番の方法である。この考え方は日本に帰国して、研究室に所属した際や、就職活動や就職した後でも変えないでいきたい。少しでも自分の意見が他の人に variable なものになったら嬉しい。
この留学がこのように無事に有意義なものになったのは、この奨学金のおかげでもあります。本当にありがとうございました。